
愛とナイフと召喚獣

L

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛とナイフと召喚獣

【Nコード】

N7094S

【作者名】

L

【あらすじ】

どうも、バカテス初作品です。

更新が遅い上に明久×翔子というマイナーカップリング。

軽度のヤンデレ好きあたりが狙い目なこの作品。

もちろんノーマルな人にも楽しめると思います、作者の好み満載ですが（笑）

各種設定

どうも、 L と申します。以後お見知りおきを。

基本的には長門×キヨン一筋でSSを書いていたんですが、今回は原作を『バカとテストと召喚獣』に変更。
カップリングはマイナーな明久×翔子です。

作者の好みを含んでいますので、原作とはちょっと違うかもしれませんが。

てか、かなり違います。

そんなこんなで設定を少々。

アニメでいうところの第二話、雄二と翔子の過去シーン。
そこががらりと変わっています。
それ故に物語は大きく紆余曲折してしまいます。その辺はプロログ（全三部作予定）を参照にて、お願いします。

共に説明は順次していく予定ですが、今のところ出そうと思っっているシステムは次の三点。

因みに結構長いにも関わらず作中でもちよいちよい話に出てくるので詳しく知りたい人だけどうぞ。

・黄金の腕輪

白銀の腕輪の完成系といっても差支えないが、少々能力が追加さ

れている。

まずは、召喚フィールドの生成能力の強化。教科はランダムor自分で指定を選べるようになり、広さも自由に変更可能（ただし上限あり）

教科を指定する場合、点数の消費が多くなると考えてください。厳密に言えば、指定した教科以外の教科の点数を20%カット（小数点以降は切り捨て）

広さに関しては一辺2mの正方形を基準に上限は一辺20mまでの正方形になる。

フィールド生成の点数は、基準となるフィールドには各教科一律で31点。それ以降は一辺1mを超える毎に点数は一律で6点ずつアップする。

一番の特徴は、故障する点数の上限がAクラス学年主席を軽く超える設定となっている。

・漆黒の腕輪

こちらは黒金の腕輪の完成系。

分身能力生成に？匹呼び出すことができ、点数は一体につき？分の1。

たとえば、三体呼び出すとしたら今の点数を三等分して各召喚獣に振り分けるような感じ。（小数点以降は切り捨て）

それにプラスして、自身の教科の点数を意図的に操作することができる。

総合科目を除いた全教科において、自分の点数を自由に減らすことができる。そして減らした点数の80%を新たに自分の召喚獣にプラスすることができる

たとえば、保健体育において学年最強のムツツリーニ。

その保健体育の点数が750点（計算しやすいように今回はきりのいい数字に）だとする。

少なくとも今作品では、400点オーバーの教科で召喚獣に特殊

能力を付与することになるので、80%カットされて尚400点を保てる点数をプラスできれば、ムツツリー二はほどの教科でも特殊能力が使えるようになる。

ただし、これによって増減した点数は元には戻らないので要注意が必要ということと、この効果を使って増やした点数を減らして別の教科に移す時も引かれた点数から80%カットが有効になることも忘れてはいけない。

・純白の腕輪

観察処分者専用（吉井明久専用と読んでください）

黄金の腕輪、漆黒の腕輪両者の能力を使うことができるが、その腕輪を使った試召戦争が終わり次第無条件に補習室行きとなり、その次の回復試験で総合科目を15%以上点数を上げ、なおかつ自分の最高点数を毎回更新しなければならぬ。
ある意味もの凄い腕輪である。

他にも色々登場する予定なので期待せずにお待ちください。

以下、H23・05・04にて更新

オリキャラ

・加藤 勝治

性格的には、負けず嫌いな感じでも負けをすんなり認められる。そんな性格ゆえに努力を重ねる人物でもある。
作品の後半からはもっと成績上位になる予定です。

システム

・各クラス代表専用腕輪

その名の通り、クラス代表に配られる腕輪。
代表になった生徒は同じクラスの生徒一人に預けることができる。

『新緑の腕輪』

植物の力を用いることのできる腕輪、Dクラス代表専用。

プロローグ 第一部 バカと文月学園と最低な教室（前書き）

本編スタート。

結構ggggかもですが、楽しくよんでもらえたら嬉しいです。

プロローグ 第一部 バカと文月学園と最低な教室

「お前ら、大化の改新はいつ起きたか知ってるか」

「645年だよね、ゆうくん」

「明久はバカだな。無事故の改新だから625年だっつの」

「ええ、違うよ。ね、しょーちゃん」

「……私は、まだ習ってない」

いつかの夕暮れ、この時は結局雄二が怒って帰ったけど次の日間
違いを認めてくれたからとくに喧嘩になることはなかった。

そもそも『神童』とも呼ばれる雄二のことだ。喧嘩なんてそうそ
うしないだろう。

もうこの頃には高校二年と同じ成績をたたき出せるようにはなっ
てるのだから、さぞかし頭が回るんだろうな。うらやましい。

そんな雄二だからこそ、しょーちゃんは惚れたのかもしれない。

その思いが雄二に向かっていると分かっているからこそ、僕はしょ
ーちゃんのそばにいる。

僕は叶うはずのない願いを胸に、今日を生きるのだった。

プロローグ

バカと文月学園と最低な教室

く明久く

「おはようございます、西村先生」

「おはよう。今日はいつにもましてブルーだな」

「……しょーちゃん」

「ああ、霧島か」

校門の前に立っているのは鉄人こと西村先生。

精神的に少し病気な僕の数少ない味方の大人だ。何回か話しているうちに仲良くなって、観察処分者になった時も先生は反対してくれなかった。

でも、雄二との約束を果たすためには早い段階で観察処分者になる必要性があった。それこそしょーちゃんのためでもあって、僕の為でもあった。

精神的に弱いのなら、その精神を強くすればいい。そう先生に話すとも言わずに了承してくれた、そして僕の成長を今も見守ってくれている。

僕は先生がとても優しいことを身に持って実感できている数少ない生徒だった。

「でも、いいのか。本当にFクラスで」

「いいんです。それが、雄二との約束ですから」

「坂本との、か。まあいい、とりあえず無理はするな」

「わかりました」

教室に向かうと、途中でAクラスが見える。

Aクラス。

しよーちゃんのいるクラス、本当は自分も入れたクラス、でも入るべきクラスではない。

僕のせいで中学時代は本当に苦しい思いしかなかった僕に救いの手を差し伸べてくれた雄二に、しよーちゃんの想い人の雄二に恩返しすべく僕は雄二と約束したんだ。

『高校二年終了までの期間、僕は雄二の駒になること』

といっても使い走りとかそういう類のものではない、雄二がこの文月学園で示したいことへの協力。観察処分者になったのもそのためだった。

「……明久」

「しよーちゃん、ごめん」

何を言いたいのかはわかる、僕だって辛いんだ。

しよーちゃんのおそばに居れないことが何よりの苦痛なんだ。

「……いい、きっと雄二が関わってるのだから」

「そうだよ、しよーちゃん」

そういつて僕はしよーちゃんを抱きしめる。

あたたかい、やっぱりしよーちゃんはあたたかいね。

「……明久」

「ああ、ごめん。……じゃ、また」

「まって」

しよーちゃんに呼び止められて、僕は進めようとした足を元に戻してしよーちゃんの話聞く。

「……また、遊びに来て」

「うん、分かった」

じゃあね、と手を振ってしよーちゃんと別れる。

これから一年間、僕はしよーちゃんと同じクラスではない。

その事実が僕をさらに苦しめた。

「雄二」

緻密な計算の上、というよりか学園長へのお願いが功を制したのか、俺はFクラス代表となっていた。

後でテストの結果を見せてもらったが、俺はEクラス最低の一人だった。詰まるどころ何らかのイレギュラーがこのFクラスに存在しているということだ。

その結果、学力では他のクラスメイトよりかははるかに良いだろう、使えるかどうかは別にしてだ。

それに明久だっている。

翔子にぞつこんで助かった、なぜか翔子の想い人が俺っていう設定なんだがその誤解は後々としておこう。

翔子が好きなのは明久自身だったのによ。

なんでこんなに俺の幼馴染は精神的にアレなん……いや、そういうのはあいつらに失礼だ。色々と世話になってるし、俺もあいつらがいなければとつくのとうに現実逃避していただろう。そんな俺が胸を張って親友って言える数少ない人間なのに、俺はどうも能力だけで人を判断してしまう癖がまだ抜けてない。

「おお、雄二ではないか」

男の割に甲高い声と少し時代劇風潮の口調が特徴の秀吉、去年の

クラスメイトだったが今年も同じクラスとはな。

「秀吉か、おはよう」

「おはようじゃ」

しかも女に見間違えるほどの華奢な体に中性的な顔。おまけに双子の姉と瓜二つときたもんだ、これはビックリもんだ。

有体のない話ののちに、我が教室に。

それにしても酷い有様だ、これは教室として果たして呼んでいいものなのではろうか、いや、呼んではいけないだろう。

もうほとんどのクラスメイトが集まっていたので、俺は代表として演説を始めることにした。

「お前らよく聞いてくれ、俺はこのクラス代表の坂本だ。代表でも坂本でも好きに呼んでもらって構わない、お前らの好きにしてくれ」

そう言い終わってあたりを見渡す。

流石に頭は最低ランク、話を聞くやつは半数近くか。まあチンピラがいなくてもマシと言えよう。この文月学園の競争率は意外と低い割に低俗な人間が少ないので結構ラッキーともいえることの一つだ。

「お前ら、この設備に文句はないか？」

『『『大ありじゃあ！！』』』

流石にこの手の話には全員引っ付くだろう、俺は演説を進める。

「いいか、この学校はだな……」

「明久」

Fクラス、学年最低クラス。

観察処分者にはお似合いのクラス、でも僕にはどうでもよかった。結局どのクラスに居たところで苦しみは変わらないのだから、あ、しよーちゃんと居られるAクラスはまだましなほうかもしれない。

しよーちゃん……。

「明久君」

「姫路さん、おはよう」

学年三位の実力を持つ彼女がここにいることはさておき、僕の幼馴染の一人だった姫路さん。

中学校は諸事情により別だったけど、この高校に来てたのは驚きだった。

「今も、翔子ちゃんのこと……」

「好きだよ、心の底から。何もかもを捧げてもいいくらいだ」

「……。まあ、とりあえず教室に入りましょう」

雄二が教室で何かを話している声が聞こえるが、さしあたり試召戦争の演説だろう、僕は関係ない。

「おう、明久に姫路。よく来たな」

雄二は僕と姫路があらかじめここにいることを知っていたかのようには話しかける。

そしてそれとは別にクラスの人たちはざわつく。

それもそうだろう、僕や姫路さんついでに言えば雄二も実は（自身の力を発揮していないだけで）学年トップクラスの成績を誇る人材なのだから。

「まずは姫路、こいつは学年で五本の指に入るくらいのエリートだ。本来ならばAクラス行確定みたいなものだが……」

「ちょっと熱が出てしまって、このような結果に」

熱、というキーワードに反応したかのようにクラスメイトは頭を抱える。

『俺も熱の問題で……』

『俺は妹が高熱を……』

『昨日の夜は彼女が……』

などと言っていたけど話していた内容はよくわからなかった。

たぶんろくな内容ではないはずだ、複数名嘘をついてるみたいだし。

「そして寡黙なる性識者ことムツツリーニ、こいつは保健体育一点に関しては学年トップレベルだ」

へえ、彼が有名な……。

一部の男子には敬意をもって評され、大半の女子には軽蔑を買うという有名な彼。僕も保健体育だけは彼には負けるよ。

かのムツツリ商会の会長で、僕もしょーちゃんの写真をダース単位でよく買わせてもらう。

「そして島田、こいつは数学だけはAクラス下位と同じくらいだ」

一転集中型なメンバーが多いことは、選択肢は狭くなれど戦略の増強になることは変わらない。姫路さんや雄二が本気になればBクラスまでは軽く制覇できるだろう、けどBクラスとAクラスとでは頭の出来が違うし、愛しいしょーちゃんだっている。

どこまで雄二の軍事力があるかが見物だね。

「そして、こいつこそ我がFクラス切り札。『観察処分者』の吉井だ」

「よろしく、『観察処分者』の吉井です。バカの代名詞を持っていますが、一応去年は学年次席でした」

『おい、まさかと思ったらマジかよ』

『あの霧島翔子と互角の成績を持つ吉井がFクラスだと』

『いける、これはいけるぞFクラス』

「おい、お前ら落ち着け。この戦争はお前らも頑張ってもらわないといけない」

一点集中型、このFクラスが序盤の得意戦法にしていかなければ他のクラスには到底勝てない、せめて僕と姫路さん無しでDクラスには勝てる位の戦力がほしい。

その間に他の戦力も成長するだろうから、そうなりやきつとAクラスにも負けないはず。

「雄二、それは良いけど試召戦争はいつ起こすきなの」

「明日の午後一からだ、そして今回の作戦会議を今から決行する」

始業式の後のHRの時間を自己紹介等に費やした僕たちは昼休みを終えてからまた集まることになり、僕は今Aクラスに向かっています。もちろんしょーちゃんに会いに行くためだ。

春休み、僕は毎日しょーちゃんに会いに行った。迷惑だったかもしれないけれどしょーちゃんは毎回快く迎えてくれて、最大限のおもてなしをしてくれた。僕にとって、しょーちゃんといえることはそれだけでもう幸せを身体で感じるほどだ。

そんな時にしょーちゃんは僕に学校が始まったら一緒にお昼を食べてほしいと言われ、僕がそのお願いを断ることはなかった。

多分、しょーちゃんは雄二に食べさせる料理の練習をしたいんだろう。僕はさしずめ練習台ということ、でも悪い気分じゃない。寧ろいい気分、これならしょーちゃんと毎日会えて一緒にご飯も食べられるから幸せに決まってるじゃないか。

プロローグ 第一部 バカと文月学園と最低な教室（後書き）

次回予告

プロローグがまだ続きます。

今回はどちらかと言えば明久（翔子依存症）が強かったですが、翔子（明久依存症）は次回から明らかになってくる予定。

最初に言っておくと、美波と瑞希は結構空気が……。そんなこと無いように頑張りたいです。

プロローグ 第二部 昼休みと昔話と相互依存（前書き）

プロローグも第二部に入り、明久を含む幼馴染組の昔も明らかに。

といってもまだまだ隠しているところもありますが（笑）

このプロローグがすべて終わるころには、だいたいこの作品のコンセプトをつかんでいる人もいるのではないかと。

というよりは、そうなるように自分が頑張るんですがね。

それでは、どつど。

プロローグ 第二部 昼休みと昔話と相互依存

「しょーちゃん」

「……ゆう」

「きつとゆうくんは嫌なことがあってちょっとイライラしてただけだよ」

「……」

「だから、僕たちいっぱい勉強してゆうくんをギャフンと言わせてやるよ」

どこまでも前向きな瞳、屈託のない笑顔、とろけるように甘い香りと愛しい言葉。今思えば、私はずっと明久のことが好きだった。

子供の頃、好きな人がころころ変わる子がいた。私も明久に会うまでは色々目移りしたものの、でも気がつけば明久しか考えられなかった。明久がいらないと思うだけで心臓が破けそうだった、好きで好きで堪らない。

……いつそのこと同棲してしまおう。

プロローグ 第二部

昼休みと昔話と相互依存

「翔子」

待ちに待った昼休み、明久の頭に埋め込んでおいたGPSや霧島グループ総勢力を上げて開発させた高性能盗聴器と盗撮器のおかげでHRの状況は手にとるように分かった。特に明久に個人専用盗聴器を設置しておいて良かった。

『……しよーちゃん』

いつもより弱々しい声に関わらず、私の心にこれほどまでに突き刺さる声。前後の文脈から私のことを好きって言うってくれる明久がいる。

それだけで今日は少しだけ頑張れる、明久がいてくれるだけで私は強くなれるから。

「翔子」

振り向けば、そこには優子と愛子がいた。二人とも私の恋路を応援してくれるとてもいい人。

「お昼は明久君と？」

「……うん、自信作」

「翔子もあんな鈍感なやつに頑張るわよね」

「頑張る、絶対」

応援を貰って元気が出た私は、Aクラスの前で明久を待つ。ちなみに盗聴器からの情報であともう少しでたどり着く予定だ。

「やあ、しょーちゃん。お待たせ」

「そんなに待ってない」

意外と早く着たことに少し驚き、そこから屋上へ向かう。

文月学園は最近の学校では珍しく屋上を解放している。といっても、Aクラスの上層でしか開けられないけど。明久は特別処置となってるから、Fクラスでも屋上に上がることができる。なんとたつて学年一を私と争うレベルなんだから、当たり前といえば当たり前。

ちなみに、明久は本当ならば私より点数が常にとれるはず。でも明久は優しいから、いつも勝つときも負ける時も僅差だった。本人は否定してるけれども、テスト中やその勉強時間もきっちり盗聴しているから隠したところで私は知っている。

それでも頑張る明久が、私は大好き。

「じゃあ、お昼にしようか」

「うん」

お互いに弁当箱を取り出し、中身を披露する。

く雄二

さて、昼メシでも食うか。

「坂本……だっけ」

俺の目の前に出てきていきなり俺を睨みつけるは、数学だけは良い島田美波だ。

「どうした、島田よ」

「別に。ただの確認、本当にAクラスに勝とうとしてるんじゃないでしょうね」

「当たり前だ」

何の為にわざわざ点数計算してまでFクラスになったと思うんだお前は。まあ、知らないんだから放っておくに限る、どうせ俺もバカだと思われているんなら思わせておけ、一回のみ試召戦争で俺をノーマークにすることも可能だ。俺が対決しない限りは点数がばれることはない。逆はあってもだ、こっちには情報のプロだっているんだからこういう時には本当に感謝しなければならぬ。

何故だか機嫌の悪い島田を軽くあしらいながら、俺はイレギュラー分子について考えていた。振り分け試験の点数がオール1点、しかも正答に限りなく近い誤答を書いて1点だけをとっている。

明らかに頭がいいやつの仕事としか考えられん、名前を聞いても顔が浮かんで来ないことから推測できる。頭が悪いやつらの出来さらに明久のFクラス確定事項、姫路の途中退室も含めてあらゆる状況をリフレインしながら望んだのに、あの結果だった。

転校生とか何とかいう話は聞いているが、今日はしかも回復試験を丸一日受けているそうじゃないか。始業初日からよく頑張るもん

だ、俺には到底真似しようとは思わないな、やるべき時にするべき事をする。それが俺のポリシーだからだ。

後でムツツリー二あたりに頼んで情報収集してもらおう。

「島田よ、あんまり怒鳴るでない。せつかくの美貌が台なしじゃぞ」
「別に、怒ってなんかないわよ」

明らかにふて腐れている島田は放っておき、俺は重大発表を行うべくメンバーを集めた。

「……ちょっと、話がある。今から呼ぶやつは俺の近くにきてくれ」
俺が呼んだのは、島田、姫路、秀吉、それとムツツリー二だ。この五人には知っておくべきことがあり、俺の野望を達成するためにもある程度の理解は必要だということだ。

「なんじゃ、改めて呼び出して」

「吉井明久。そいつについてだ」

「明久くん？ 今いませんけど」

「ああ、その方が何かと都合が良いし、この件の一部にあいつがいたら困る話もあるし、あいつに許可をとって話したいこともある」

「その話って何よ」

「まず、今回の試召戦争の目的だ」

「…… Aクラスの乗っ取り以外にも目的が？」

「ああ、その話をする前にまず明久の話をしよう」

「吉井君の話？」

ことは数年前に遡り、俺達が小学生高学年の事だった。

当時は明久や翔子とは家が近所で同じ小学校に通っていたのもあり、俺達はいつも一緒に遊んでいた。

その当時、今はこんな感じなんだが頭がちよいと良かった。そのせいで明久や翔子を見下すこともいくらがあった。それに上級生に對してもだ。

今思えば俺はあいつらに酷いことをしてしまった、今でも後悔するほどに。

その日、翔子がいつもバカにしていた上級生達に絡まれていた。俺が翔子と一緒にいることには気がついていたのである、そして翔子があんな目にあつていれば俺がそこへ駆け付けるだろうと考えたに違いない。

そんな時、翔子が助けを呼んだ。

俺じゃなく、明久をだ。

刹那階段の方から膨大な音を鳴り響かせ明久が走ってきて、そして教室に入り込んだ。

近くにいた俺には目もくれずにな。

明久は頑張った、たったひとりの好きな人の為に必死で頑張った。だが、相手が悪い。

明久は翔子の目の前でコテンパン、それも小学生にしてはやり過ぎなんじゃないかって位だった。

一応、騒ぎに気がついた教職員達によって上級生は取り押さえられたが、明久はそれから三日間意識不明の状態だった。

あの時、俺が翔子を助けに入っていれば、明久と共に戦っていれば、俺は後悔しなかっただろう。

そして明久が目覚めた時、既に翔子は明久依存症になりかけていた。自分が明久に助けを求めたせいだと、自分の力が足りなかったせいだと。

上級生は最初から翔子を狙った訳ではなかったらしい、あんなバカでも女の子には手をだせなかったからだと思うが、奴らの狙いは最初から明久だった。

明久がやられれば俺が真っ向からやってくるとでも考えたのだから、だが執拗にも踏ん張る明久に奴らは明久の精神をも壊す程の痛みを加えた。

その場にいた翔子にも同じ位の心の傷を負わせて、な。

目が覚めてからの明久は、とてつもなく頭が良くなっていた。少

なくとも中学生レベルの主要三教科はとくに理解していたし、理科や社会は高校生レベルにまで到達していた。

だが同時に、明久には心が明らかに欠陥していた。

何をするにでも翔子を呼ぶんだ、24時間翔子が傍にいないと気が済まない状態。いわゆる翔子依存症つてやつ、あの時の明久のパニックは大変なものだからな、翔子はさぞかし辛かっただろうにな。

と、普通なら考えたのだろう。

その翔子本人もが明久に依存していたのだからな、逆に翔子も幸せだったろうよ。

今は何とか別離出来ているが、こういう昼休みとか長い時間は二人でいたいんだろうよ。

「とまあ、こんな感じだ。色々と省略したが概念は変わらない」

「……普通ならアレだが、相互依存とならばFFF団が入る暇さえないだろう」

ムツツリーニがそんなことを言っていたが、FFF団なんて代物を俺は知らなかったのとととと作戦会議に移るとしよう。

「それで、作戦会議だが……」

「待ってください」

「どうした、姫路」

「翔子ちゃんは坂本のが好きだと、吉井君は思っていましたよね」

「ああ、多分今でもそうだろう」

この話（明久の勘違い）は基本皆が知っている周知の事実だが、明久はそれを幾度も否定している。

翔子依存ピークだった時期のことを頭に入れてるのが、自身がかけた迷惑でもフラッシュバックさせてるんだらうか。

その辺は、明久だけが知る真実だ。

「じゃあ……」

「だからこそ、あいつは俺に従う」

姫路の声を遮って、俺は答える。

「あの日の約束を果たすべく……な」

いまだに覚えてるとは、我ながら酔狂な奴だ。が、きつちり覚えとかないといけない。明久のためにも、翔子のためにも……そして自分のためにも。

「して、その約束とはなんじゃ」

「高校三年間は俺の野望に全助力を仰ぐこと、これが俺から明久への約束。そして明久が要求したことは只一つ、この野望が叶ったら

俺にもう一度翔子と話をつけるってことだ」

「それって……」

「結局のところ、明久は俺の野望ひいては自分の野望に全力を注いでいるだけだ。あいつの頭をよくしたのも、この試召戦争の切り札にするためでもある」

常識を身につけさせるといふ意味もあったが、その辺はあまり効果は表れなかった。一般的な常識の三分の一位は理解してくれたとは思うが。

「明久はおぬしの道具じゃないのじゃぞ、それなのに真実を伝えずに……」

「おい、誰が親友を道具扱いした。俺は明久の同意の下、きちんとした勉強を叩き込んだだけだ。その時に一緒にいた翔子にも同じ位の基礎がついているがな、それでも俺はあいつらを道具扱いする気はないね」

あの時には既に俺のすぐそばまで学力をつけれる程の理解力があった、それに今もきつと毎日欠かさず勉強に励んでいるはずだ。それがあいつのためでもあるから、というのは今更言うまでもないがな。

「……まあ、私達はこの汚い教室から抜け出せればなんでもいいわ」

「じゃが、坂本よ。Dクラスにはどうやって勝つ気なんじゃ」

「今回の作戦は、特にはない。ただ試召戦争に慣れることが目的だ、

持久戦になればこっちの方が有利だからな」

明久も姫路も存在は知られているが、Fクラスにいるという情報を握っている人数は少ない。それを突こうじゃないか。

「姫路や明久の戦力がばれたところで一日二日ではどうとでもなるはずもない」

「Aクラストップ5の内、二人もいるんだっけ」

「なんかそういわれると照れます」

皆の志気を削がないためにも言わないでおくが、明久が本気になればCクラス位までなら一人で打破できるだろう。あくまでも推測にすぎないが、今はひよつとしたらもつと上を狙えるかもしれない。

一年の時にはセーブをかけていたからな、それがないと思えばあと一割から二割は上がるはずだ。

それに、明久には『純白の腕輪』もある。多少のリスクはあるが、試召戦争後の回復試験は結局リスクだ、それに使った後は絶対条件でもあるので……。

いや、あれには……。

「まずい、明久に確認をとらないと」

「一体どうしたのじゃ」

「明久には専用の腕輪があるんだ、召喚獣のそれとは違うやつだが

特殊効果を使える点ではほぼ同じだ」

「それがどうかしたんですか」

「あの腕輪のリスクは明久にとってはある意味地獄に成り兼ねないんだよ」

あの『純白の腕輪』、やっぱりな設定をつけやがって。

プロローグ 第二部 昼休みと昔話と相互依存（後書き）

次回予告のようなもの。

各種設定で書いたように『純白の腕輪』が出てきます。普通なら、前の二つの腕輪を先に出すべきだと思いますが、効果を使うのはまだまだ後なので存在だけでもだすことにしました。

そして、4月24日以前に設定を読んだ人には申し訳ございませんが、話の都合上オリキャラを出さざるを得なくなりました。

まあ、このカプの時点で原作崩壊はまのがれませんがね。

一応役柄は決まっていますが、名前やら性格やらがまだ考え中です。はっきりしたら各種設定の方にも書くと思うんで、その辺はよろしくお願いします。

プロローグ 第三部 お弁当とシアワセと腕輪のリスク（前書き）

どもども、作者の L 通称星Lです（笑）

今回では終わり、Dクラス戦へ向けて本格的に始動します。

今回オリキャラを出していますが、詳しい設定は各種設定に後日載せる予定です。

多少のネタバレを含ませようと思っている、というよりはまだまだ基盤しか固まっておらず、この作品にスパイスを足してくれる存在になるための準備期間ということぞ。

それでは、どうぞ。

プロローグ 第三部 お弁当とシアワセと腕輪のリスク

「明久……っ」

「ふ、ふん。お、俺達に逆らったからだよ」

「おい、逃げるぞ」

「明久っ……」

「嘘だろ、明久……」

十数人の上級生に散々私刑された明久は、無惨にも体中に痣や流血を施してあった。

骨折なんて数箇所だけでは済まない、言葉さえもまとまて喋ることがままならない位の精神的苦痛を負ったのだからな。

そんな中、明久もあんな小学校にはいられなかっただろうし、卒業までの数年を明久は精神病院のベッドで過ごし、その隣にはいつも翔子がいた。

あんな事件があった後だからか、俺と翔子や親族以外には誰も見舞いにくることはなかった。

プロローグ 第三部

お弁当とシアワセと腕輪のリスク

〜明久〜

昼休み。

なんだか待ちに待った、という感じが凄くしたけれども、時間は相対性だからきつとそう感じたただけだろう。

雄二に教わったことも、こういう時にふと思い出せるから以外と勉強するのは楽しいもんだと思う、こうやってしょーちゃんと一緒にいるからこそ味わえる代物だろうけどね。

「じゃ、食べよっか」

そういつて弁当の包みを開ける。僕は料理が得意だから、お互いがお互いの弁当を作る。そうすることで僕もしょーちゃんも幸せを感じる事ができて、とっても嬉しいことなんだ。

「はい、あ〜ん」

しょーちゃんに向けて、その小さな口に似合う一口大に切っておいたから揚げを食べさせる。

もきゅもきゅと心地好い音が聞こえる中、美味しそうに自分が作ったから揚げを食べるしょーちゃんを見て、背筋がゾクつとするような快感を感じる。

「どうかな、しょーちゃん」

「……美味しい」

「まだ沢山あるからね、遠慮せずにどうぞ」

全部あ〜んしてあげたいけれども、昼休みは有限だしこの後は回復試験も行わなければならない。

点をとることにこしたことはない、とりあえずはしょーちゃんに引けをとらない点数をとっておけばいいんだっけ。

「今度は私のばん」

しょーちゃんが差し出したミニハンバーグを食べようとしたその時、僕の携帯が鳴った。

誰だよ、僕らの至福の時間を踏みにじる奴は。例えどんな奴であろつと万死にあた……。

『着信 坂本雄二』

前言撤回。

「しょーちゃん、ちょっとだけ待ってて」

雄二なら仕方がない。僕は雄二の駒なのだから、雄二のお呼びとならば何よりも優先させなければならぬからだ。

「もしもし、雄二」

『明久、お前の過去最高得点って覚えるか』

過去最高得点……きっと雄二は『純白の腕輪』について話したいんだろう。

「総合科目は4500点オーバーだけど」

残りはあまり覚えてないんだ、でも一応データだけは携帯に入ってるから後でメールでもすればいいさ。

『今回は絶対最高得点をとるな、だいたい理由は分かってるだろ』

「それは大丈夫だと思う、各教科全部イーブンの点数をとってやるさ」

文月学園のテストは空白さえなければ次々とテストが受けられる、紙の無駄遣いからそろそろ電子化しても良いんじゃないかと思いつながら、雄二との会話を続ける。

あ、ちなみに一応使った後脱色してもう一度紙にしているらしい。所謂100%再生紙ってやつ、何かと頑張るなあ文月学園。

『いや各教科400点以上上限は450点でだ』

ふむ、だいたい腕輪の特殊効果でも睨んでるんだろう。まあ、今回は雄二の護衛だけだからあまり使わないでよさそうだから良いんだけど。

結構僕の腕輪は特殊らしいからね、だいたい理由は分かるけど。

高校一年の半年間はバカを“演じていた”からあの学園長も『どうせこいつが腕輪を使えるようなレベルには至らないだろう』と思っただに違いない。

実質、僕の召喚獣の特殊効果は尋常じゃない。

それはまたの機会に話すとして、僕は今言われたことを頭にインプットさせる。

「了解、じゃあまた後で」

待たせたであろうしよーちゃんに詫びを入れ、至福のお昼休みを続ける。

く????

ようやく回復試験とやらが終わったようだ、全科目を受けるのは流石に骨が折れる。

まったく、こうなるなら最初からAクラス狙ったときや良かった。今更後悔したところで遅すぎなんだが、その辺は致し方ない。

いや、あいつに復讐するには最低クラスに入って試召競争で勝つしかない。どうせクラス代表もたいしたことないだろう、名前も顔も知らんがな。

さて、俺は設備最悪の最低クラスに足を運ぼうじゃないか。

待ってるよ、カス共。貴様等の頭を俺が直々に改善してやるっ、そして俺に従うがよい。

く雄二

明久との連絡が終わり、俺は一息つきながら弁当に箸をつける。

「そういえば、姫路は最高得点はどれくらいなのじゃ」

「私はだいたい4300強位です」

十分。

だいたい、学年主席と次席のレベルとトップ5までのレベルで二つも差が開くのが謎だ。

明久も翔子も本当に頑張ったに違いないだろう、なんて考えていたら明久からメールが来た。

「おっ……。ってマジか」

そこの内訳はこうだ。

From 明久
To 過去最高得点内訳

高校一年学年末テストにて。

一応これ以上はとれる自信あるけれども、雄二の条件を満たすなら教科によっては最高得点を越えるよ。

国語総合	368
古典・漢文	405
数学	397
物理	375
化学	381
日本史	498
世界史	504
現代社会	462
英語	399
英文法演習	389
保険体育	364
総合科目	4542

「雄二よ、明久はとんでもなく頭が良いのじゃな」

「数学で負けてたなんて……」

「……勝ってる」

「流石学年主席レベル、といったところでしょっか」

正直これには驚いた。

点数の高さではなく、内訳点数のばらつきに、だ。

試験科目の中でも、試召戦争に関連する科目は全部で11科目。全てで腕輪の特殊効果を狙うならば、各教科400点以上とったほうがいいはずだ。

わざわざ点数にばらつきをつける理由が、明久にはあるというのか？

とにかく、俺の野望のためにも明久には指定しただけの点数をとってもらわないと困る。

「ちいーす、ウジ虫どもこんには」

そこには、白髪碧眼の……まさか。

「勝治っ、貴様……」

「あれ、雄二じゃん。久しぶり」

「なんでここにいるんだよ」

「所謂トレードだよ、雄二。だから俺の名前じゃなかっただろ、生徒名簿」

くっ……。俺とすることがぬかった、あいつならやりかねんこと

を除外視してたなんて。

「坂本、知り合い？」

「因縁つきのな。名前は加藤勝治、これだけ言えばおまえらも分かるだろう」

加藤勝治、ある有名私立高校にトップで入学したやつだ。その学力は文月のAクラス中堅となんら変わらない、ただ、今どれくらいの学力を持っているかが問題だ。

「そんなにつんけんするな、雄二。今回は一応お前の味方だから」

「お前から言うなんて珍しい、何か頭に悪いもんでも喰ったか」

「いや、至って正常だ。だが、あいつを倒すのに協力してもらおう」

「あいつってまさか……」

「吉井の野郎だよ」

多分、全国模試とかの結果からだろう。

高校生になって初めの全国模試で、あいつは全国一位になった。翔子や姫路を差し置いて、奴は一位という言葉にある一種の誇りを持っているみたいだから、さぞかし嬉しかっただろうに。

問題は二回目。

既に召喚獣の設定の地盤がついたところに、俺は明久に全国模試で

トップを狙わせたところ、ガチで一番をとりやがった。

以前までのギャップもあり明久は直ぐさま時の人となった。が、それはあいつにとって良いことではなかった。

「だが加藤よ、明久はFクラスだぞ」

復讐に燃えるそいつに、俺は奈落の底を見せてやった。

クラス名簿の一番下、そこに吉井明久の名前はそこにあった。

「ま、まさか。吉井は……」

「ただいま、雄二。そろそろ回復試験の準備にとりかかりたいんだけど」

加藤は明久を見つけた瞬間、両腕に金色と黒の腕輪をはめて明久に宣言した。

「吉井明久、今ここであつたが百年目。試召戦争を申し……」

「おい加藤。お前、明久は回復試験を受けてな……」

俺達二人が口論を始めそうになったその時、間に割って入ったのは明久だった。

「その勝負、受けた」

なにつ。

「明久、相手はAクラス並だ。今のお前の点数じゃ無理だ」

「大丈夫。加藤君、試召戦争の前に教科の指定をもらっていいかな。僕は見ての通り、全教科回復試験を受けてないんだ」

「ふん、良いだろう。どうせ俺に勝てはしない」

「じゃ、日本史で」

「分かった。起動」

加藤の腕輪が光り、召喚フィールドが生成される。

「我が学力を示し召喚獣よ、今契約に従いここに現れよ」

「おいで、僕の化身」

「「試召召喚」」

対戦科目 日本史

Fクラス 加藤勝治 386点

VS

Fクラス 吉井明久 423点

「君には日本史で十分」

腕輪の特殊効果を使うまでもなく、明久は勝利した。まあ、当然と言えば当然のことである。

まず、技術量の違い。

明久は『観察処分者』として召喚獣の扱いには慣れている。どう考えてもこの学年では一番は確定だ。

そして、目に見えるように点数の違い。

最後に、あいつの翔子に対する想いだ。

「僕は、負けない。しょーちゃんのためにも、雄二のためにも」

何故俺がいるのやら……。

「それにしても、一体いつ回復試験受けてきたんだ？」

膝から流れ落ちた加藤を放っておき、俺は明久に話しかける。

「ついさっき。でも出来があまりよくないからもう一回受けようかなと思って途中で帰ってきたんだ」

それであの点数か。

「と、いうわけで。今の試合を見たものはラッキーだ。あの点数差で明久が瞬殺したということは、Dクラス相手ではどれだけかかってこようが問題ない。お前達は安心して戦いに挑め」

クラスの野太い戦闘意思の叫びを聞き、俺は確信した。

待ってるよ、Aクラス共。

プロローグ 第三部 お弁当とシアワセと腕輪のリスク（後書き）

如何でしょうか。

この作品のバトルのコンセプトは基本的に原作と一緒にです。多少システムや教科には自分なりの設定を入れています。

システムは作品が続いていく中で、また徐々に増えるかもしれませんのであしからず。

第一話 試召戦争と僕の企みとおばあちゃん（前書き）

……。

えっと、こんな感じだったけ試召戦争って。

なんか違うような違うなような？

まあ、星レクオリティってことで。

今回も改変しちゃくっちゃいますよ。

第一話 試召戦争と僕の企みとおばあちゃん

まさか、この俺が……。

戦いの後に残ったのは、今までで一番強く感じた敗北感と自分に対する憤りだった。

幼少期からエリートとして生きてきた俺に三度も敗北を許したのは、こいつが初めてだった。

「君、僕は負けられないんだ」

「俺を哀れみの目で見るんじゃない」

「そう、でも今回の試召戦争は君にも手伝ってもらおうよ」

それだけ言い残して、奴は立ち去っていった。

「戦死者は補習」

今回の反省をする暇すらなくゴツイ先生がやってきて、俺を瞬間に連れて行ってしまった。

第一話

試召戦争と僕の企みとおばあちゃん

く明久く

「雄二、今から回復試験受けてくるよ」

「よろしくな」

回復試験の場所は各自で設定できる場合がある。

もちろん成績優秀者だけだけれども、僕の場合はそれに加えておばあちゃんのおかげで色々と融通が利く。点数の微調整とかもそうなんだ、僕が指定しておいた（雄二に言われておいた点数）以上をとってさえすればその点数にすることができるんだ。

まあ、結局のところあの最高得点もおばあちゃんに頼んで変更してもらったんだ。

「失礼します」

「よくきたね、明久」

「学園長、学校内では苗字で呼んでください。あの雄二やムツツリ一二にだってばれてないんですから」

学園長室は完全防音の上、電波ジャミングや盗聴防止も完備。

「悪かったよ、まあくつろいでおいで」

「回復試験受けてくるからあまり時間はないんだけどね」

「そんなもん、前回までの繰越を使えばいいさ」

おばあちゃんに点数の改変を頼む際、それを越えた点数は繰り越

し点として僕が自由に使うことができる。今回はその願いもしてきたんだけどその手間が省けてよかった。

「ありがと、それとこの『純白の腕輪』そろそろ完成しないかな。まがりなりにも最高点数15%アップはきついからね、その辺のリスクを減らしてほしいんだけど」

「それに関しては完成したよ、今からでもアップグレードするかい？」

「そう。じゃあ頼むよ」

く雄二

「明久他多数が回復試験を受けている間、俺も回復試験を受けていた。」

「まあ、Dクラスに対抗する点数なのなら適当にとって置けばいいんだが、とりあえずは普通に試験を受けることにする。」

「今度いつ試召戦争をするかわからないからでもあるが、他のクラスに対する牽制にもなる。」

「とりあえず、総合科目で3000点位はとっておいた。」

「ふう、回復試験も楽じゃないぜ」

振り分け後すぐだったからな、前代未聞のせいもあってか結構難しい問題がちらほらとあった。

俺は問題無かったがな。

「お疲れ様、雄二、皆」

「それにしても、明久と姫路はもの凄いスピードで解いておいたのう」

「僕の場合は、神経の道が違うからね。無理ないよ」

明久は、あの事件以降頭が良くなった一つとして上げられるのが『脊髄の思考化』だ。

普通、脳から指令を受け脊髄、そして各臓器や身体に伝える訳だが、明久は脳から指令を受けることなく脊髄がその指令を与えている。

例えば、とても熱いやかんに触れた時は何も考えていなくても手を引っ込めてしまうだろう。

それが明久の場合、より精密に出来ると言う訳だ。

これにより、明久は脳と脊髄に司令塔を持つこととなり、問題を解くスピードが飛躍的に上昇しているというわけだ。

「私の場合、問題を見た瞬間に答が出てくることが多いんですよ」

多分姫路は短期記憶をほぼ全て長期記憶に持って行けるんだと思う、本人に直接聞いた訳じゃないから分からないがな。

ちなみに瞬間記憶能力とはちよいと違う、瞬間記憶能力は基本的に覚えたことは絶対に忘れない能力のことである。

これに対して姫路の（面倒なので略称を『長期保存記憶能力』とする）能力は、短時間で覚えた記憶を長期記憶にすり替える能力とともに、その長期記憶を長らく保存する能力である。

例えば、好きな歌の歌詞とかはど忘れしても思い出せることが間々あるだろう。

そんな時は脳が長期記憶から記憶を引っ張り出しているんだ。

姫路は、短期記憶を長期記憶に、さらに長期記憶を超長期記憶にする能力を持つてるから、一度見た問題でミスることはそうそうない。

「へえ、私の脳ってそんな感じなんですか」

今さっき考えた理論をぶつけてみたところ、姫路は自身についてはよく知らないようだ。

その天然キャラが頭の良さに繋がってるかどうかは、俺も知らない。

「そして加藤君だっけ、君もお疲れ様」

「ふん、たまたま調子が悪かっただけだ」

「おいおい、今やっても明久は400はあるはずだぞ」

「この学校……テスト方式が逝かれてやがる」

まあ、慣れるまではの話だ。

「とりあえず、今回Dクラス戦の作戦を簡単に説明する」

「……して作戦とは」

「慌てるなムツツリーニ。今回は単純明快、敵大将の首を全員で取りに行け。守りのメンバーはこっちで決める、それ以外は確実に試召戦争に慣れる」

「雄二、僕はあまり闘いたくないんだけど」

「明久には守りに入ってもらおう、お前が一番辛いかと思うぞ」

「全てはしよーちゃんの為、僕は雄二の命令ならば従うよ」

相変わらずだな……。

本当にため息が出ちまうほどに、俺は落胆した。人前ではださな
いかな。

「で、後の守りのメンバーは」

「明久一人居れば十分……と言いたいところだが、今回は我がF
クラスの戦力がどれほどのものかをあいつらに誤認させる必要があ

る。従って、姫路と加藤両名は守りに入ってくれ」

「分かりました」

「気に食わんが……仕方あるまい」

切り札はやはり最後まで握っておくに限る。

その後、残りのメンバーを三分して各部隊とし、試召戦争に備えた細かい作戦を伝える。ちなみに、第一部隊から島田、秀吉、ムツツリーニの順で部隊長だ。

「あつ、試召戦争の宣告が……」

「ワシがやっておいたぞ、そんなそぶりが無かったから焦ったぞ」

「おう、サンキュ」

俺にしては緊張しすぎとしか言いようがないほどに、緊張していた。

この緊張が後ほど感じる恐怖とは、まだ誰も知るはずが無かった。

〜島田〜

Dクラス……。

あまり闘いたくは無かった、あのクラスには私の世界一うざったい敵がいるから。

この際決着をつけてあげようか、あの同性愛信者め。

試召戦争開始時刻となり、私は第一部隊を率いれて突撃する。

Fクラスの中でも数学がいい人（それでも点数は低いんだけど）を連れての数学勝負、一応数学の先生と行動してるから問題はないはず。

「来たなFクラ……」

「Fクラス島田美波、Dクラスに数学勝負を申し込みます。試獣召喚」

対戦科目	数学	
Fクラス	島田美波	301点
VS		
Dクラス	田中元	他5名
合計	298点	

Dクラスでこの成績なら多分下等レベルだろうか、とりあえず一対一に持ち込んで適当に慣らしておいた。

「相手はあまり対したことない、数で攻めなさい」

野太い叫びと共に突進していくクラスメイトの後ろで、私は高みの見物……。

「お姉様……」

というわけにはいかないようだった。

「美春、貴女まだ私に付き纏うつての」

「お姉様、私は、私は……」

「消えなさい、……試獣召喚」

数学

Fクラス 島田美波 302点

「仕方ありません、今度こそはお姉様を。試獣召喚」

数学

Dクラス 清水美春 183点

「また、点数を上げましたねお姉様」

気持ち悪い。

「とつとと終わらせる、覚悟しなさい」

「お姉様に罵倒されて……美春は幸せ者です」

「だから、やめなさいって、言ってるのに」

攻撃を仕掛けるけれども、集中出来ていないせいか攻撃が当たら

ない。

「くっ、何だよ」

「お姉様に教えてあげます」

そういうと、美春は左手に腕輪をはめてこう唱えた。

「『新緑の腕輪』よ、今私にその華麗なる魅力、そして凛々しい中に眠る強さを与えんことを……ソーン・ウィップ棘の鞭」

「何よその腕輪、召喚獣には400点以上ないと腕輪は……まさか」

「そのまさかですよ、お姉様。私はDクラス代表、無条件で腕輪を使えるんです。まあ、一日の回数には制限がありますが」

今日知ったことだけでも、各クラス代表にはあらかじめ腕輪が給付されていて簡単に決着が着かないようにしている。

彼女の場合は『新緑の腕輪』、青々とした森のような色がモチーフの腕輪であり、植物の力を操る。

「やっかいね……」

棘がついているせいもあり、迂闊には攻撃できないのが現状。このまま闘ってもジリ貧になるのは確実だ。

「お姉様……」

攻撃していく中で最高に気持ち良さそうな顔をする三春、それが

堪らなく気持ち悪い。

「こうなったら、援軍を呼ぶしかない……」

「来ませんよ、援軍」

「どういことよ」

「ここに来ているDクラスの面々は下から数えて十数人、レベルが低いカスどもです。もう二つには結構な戦力を当てていますし、そろそろ終わりでしょう」

そう告げるのとほぼ同時に、味方の使者から他部隊の戦死を告げられ、私は自分の部隊も既に壊滅的なことを目の当たりにした。

く雄二

まさか、代表さんまで出てくるとは……。

「おい、そろそろまずいんじゃないかねえか」

「少し落ち着きなよ、加藤君。まだ最後の砦は君のおかげでノーダメージだ」

明久や姫路の存在はまだ知られていないし、今は加藤を知らしめることの方が優先だ。

「本当、ありがとうございます」

「俺だって好きでこんなこと……」

「とりあえず、入口が一つしかない屋上を選んだのは正解だったね」
その件に関しては明久と姫路に礼を言わなければならん。

屋上は成績優秀者の特権だが、その成績優秀者と共にいれば屋上にいても良いことになっている。

あ、加藤は屋上の扉の前で闘ってもらっている。

「俺の扱い酷くないか、ってまた来やがった」

がしかし、あの野郎。明久との対戦がよほど堪えたか、もしくはセンスがいいのか試召戦争に慣れてきている。

さてと……。

三つに分けた部隊もはや壊滅状態、やはりムツツリー二に保体以外は無理か。

一応島田が残ってるみたいだが、はたしてあいつが代表に勝てるだろうか。代表には専用の腕輪が支給される、たしかDクラスは『新緑』ちなみにFクラスのは明久に預けている。

俺が持つより面白い使い方をしそうだし、万が一翔子と闘う時にも役立つと思うからだ。

さて……、そろそろアクションを起こさないとな。

「姫路、出番だ。ここまで俺のシナリオ通り、流れは分かってるよ

な」

「私はそこまでバカじゃないんですけど、まあ良いです。加藤君、少し道を開けて」

「お、おう」

姫路の突撃がああ腕輪にどれ程通用するか、見物だが今はそんな隙はない。後でムツツリーニが仕掛けている監視カメラで確認するとして、今はコイツらの相手をする必要がある。

「加藤、残りの点数はいくつだ」

「まだまだあるぜ。腕輪分でしか消費してないし、相手も後半分位だ」

と、余裕をかましているところだが、声は震えていた。

もって5分前後……。

「明久、ちよつと」

「何、雄二」

「加藤が持ちこたえている間に、姫路が勝つ可能性は低い。そこで明久、もう出場しちまえ」

「命令？」

「ああ、そうだ」

「なら……」

明久はクラウチングスタートの構えをとり、ダッシュを決めながら。

「試獣召喚」

ここまで頼もしい明久の背中はずしぶりだった。

第一話 試召戦争と僕の企みとおばあちゃん（後書き）

いかかでしょうか。

Dクラス代表を清水さんにしてみました、まあ歪んだ愛情を持つ人物を増やしたかっただけというのかなんというか。

基本的に星しはこういう少し歪んだ愛情が好きです。

人によっては気持ち悪いかもです、すみません。

とりあえず、次回予告。

Dクラス決戦??

今回おばあちゃんが出てきました。元ネタは『バカ努力』こと暮灘さんです。

パクリと言っなのオマージユなんです、暮灘さん他が不快に思うなら申してください。直ぐに手直しいたします。

その場合結構な改変がおこなわれますが（笑）

それでは、また今度。

第二話 同性愛者と天然博識と依存愛者（前書き）

今回でDクラスが一応終局を迎えます。

色んなところを短縮しているので、これ以降しばらくはFクラスでの絡みが多くなってくるのではないかと思います。

さて……今回は他作品からネタをめちゃくちゃ持ち込んでます。

最近見たアニメがばれてしまいますね（笑）

ちなみに、星しは無口属性＋「あなたがそう言うなら」という台詞萌え属性が備わっています。

勿論知らない情報w

第二話 同性愛者と天然博識と依存愛者

「試獣召喚」

『なつ、吉井明久だと』

『あいつがなんでここに』

「君達には分からないと思うよ、そして……」

邪魔。

「やってくれるじゃねえか、吉井よ」

「今は君に構ってる暇はない、ええと総人数は……ざっと八人か。じゃあ君達、君達はここでの記憶なくなる」

大丈夫、怖いのは始めだけ。

「おい、吉井。こいつらに何をしたんだ、全員が一瞬にして眠っちまった」

「ご解説どうも、後は君に任せた。とつとと代表を倒してきてくる」
「よ」

僕のやるべきことは終わったからね。

「気に入らんが……仕方ない、お前に任せよう」

せいぜい皆僕の駒として動くがいい。これらも全て余興、まあ僕が動かなければいけないかったことが唯一の誤算。とりあえず催眠術にはかけておいたけれども、僕がFクラス生徒だとばれるのは時間の問題。

だから雄二は出演しろと言った。

まあ、黒幕を誰が握っているか不明だし、正直そんなそぶりを見せないまま黒幕を僕が握っていたとする……。

とてつもなくゾクゾクしない？

「しょーちゃん……」

いつか愛してると言えるその日まで、僕は雄二の操り人形で道化師さ。

第二話

同性愛者と天然博識と依存愛者

〜姫路〜

私が美波ちゃんの所に行き着いた時、彼女はまだ必死に闘っていました。

「邪魔物ですね……」

「瑞稀、助けに来てくれたの？」

「……」

私が見た光景はとても戦闘とは言い難い光景、様々な種類の植物が美波ちゃんの召喚獣を……。

無残なまでに絡みとっていた。

対戦科目 数学

Fクラス 島田美波 22点

VS

Dクラス 清水美春 298点

美波ちゃんは300点はあつたはず、なのになんでこんな点差が……。

「この『新緑の腕輪』にはね、相手の召喚獣の力を自分の力にする能力もあるの……」

だからあんなに点差が。

「Fクラス姫路瑞稀、Dクラス代表清水美春に試召戦争を申し込みます」

「またおいしそうな養分ですね」

「試獣召喚」

私の召喚獣が出たことにより、ルールに乗っかって美波ちゃんに召喚フィールドから出るよう告げる。

それにしても『新緑の腕輪』は、厄介そうですね……。

「……人間の取れる点数じゃないですわ」

対戦科目 数学

Fクラス 姫路瑞稀 658点

VS

Dクラス 清水美春 301点

「この点差なら、問題ないでしょう」

勝負はスピーディーかつスマートに、そして隙を作らないこと。
このSSSSこそ、勝負のモットー！

「とつとと終わらせます、私にあったことが貴女にとっての終止点
だと思いなさい」

捕まる前に、こつちから仕掛ける。いわゆる先手必勝、行動を起
こさなければなにも始まらない。

「『^{レールガン}超電磁砲』チャージスタート」

チャージする隙さえ与えない、私の動きにまずついて来れないの
だから……。

「無駄。いくら早くても、私の『^{マイ・テイルナ・ノーグ}完全なる植物園』からは逃げられ
ません」

「嘘……」

私の召喚獣は既に捕まっていて、身動きが取れない状態だった。

「瑞稀っ！」

「大丈夫です、まだ『超電磁砲』は生きてますから」

「それは、この陳腐な銃のことですか」

「それは……」

「どつやらそついつことみたいで、とつと破壊するに限ります」

「ダミーですよ」

私の『超電磁砲』は特殊腕輪の能力、それは私がチャージに使った自分の点数（試召戦争中の教科を除く）分を電磁エネルギー砲として射出。

溜めた点数×乱数（50〜100%）が攻撃力となり、相手の召喚獣に掠りでもしたらダメージを与えることができる。

「チャージ完了、装填点数650点、乱数表示……68%」

少々威力が物足りないですが……、まあ良いでしょう。

「『エレクトリック・キャノン電磁大銃』発射します」

「くっ……、まだまだですわ『ソーン・ウォール棘の壁』」

さしずめ『壁』というものは場合によっては脆いものなんですけどね。

「無駄ですわ、私の『電磁大銃』は止められません」

「止める。そんな訳ないじゃない、お姉様とまた遊びたいのに……」

そういう間に『壁』に『大銃』が当たる、十分に堅かったかもし
れませんが私の前では無力。

所詮は『壁』脆く朽ち果てるもの……そう思っていました。

「『ラバーネット電磁断絶の蔦網』よ、あの科学物質を取り除いてしまいなさい」

「ゴムの樹……まさか」

「そのまさか。君が電磁系統の技を使ってとても有り難かつ
たよ、この『電磁断絶の蔦網』の能力も把握しておきたかったし」

まさか、ここまで操れるとは……。

「さて、美味しい養分を沢山もらおうかしら……」

「スベリオル・サモン特殊”試獣召喚、Fクラス吉井明久、Dクラス代表に勝負を仕
掛ける」

明久君。

「姫路さん、待たせたね」

「その、ありがとうございます」

明久君の“特殊”試獣召喚によって出てきた召喚獣が出た瞬間、私の召喚獣は消えて双方一対一になってしまいました。

一体どういうことでしょうか。

「明久」

「やあ清水さん」

「黙りなさい愚民」

「そんな威勢がいつまでも続くと思う？」

「なんのために特殊試獣召喚まで明かしたと思ってるんだろうか、この同性愛者は。」

「黙りなさい『棘の鞭』」

「『ディストーション歪んだ空間』」

彼女の攻撃は僕の召喚獣に当たりそうな位置で軌道がずれ、実際のところ僕にダメージはなかった。

「当たらない？」

「Fクラス代表腕輪『虚無の腕輪』の効果、特殊試獣召喚で召喚された召喚獣の腕輪能力をリスク無しで発動できる。その時、自分と戦う召喚獣以外の召喚獣を強制的に消滅させる」

「そんな……攻撃無効能力をリスクなしで」

「そして、僕の特召喚獣の腕輪能力。それが『映身』」

「『映身』……？」

僕以外の全員が固まった。

そりゃ、そつでしょ。

「『映身』は、自分が見た腕輪の能力を自分が使うことができる」

今回の『歪んだ空間』はおばあちゃんに見せてもらった腕輪能力の一つだ。春休みに通って、実験の手伝いをすると同時に修得したものである。

「そのかわり、僕は特殊試獣召喚のリスクとして対戦教科以外の科目の点数を一点に下げられてしまう」

つまり教科の変更があったり、攻撃に他教科へダメージを与えられるものがあれば（実際に存在するのだけでも）僕の特効効果は無駄になる。

「こんな愚民に……」

「さつさと終わらせて、しよーちゃんに褒めてもらうんだからとつとと消えて」

「消えるのはそつちです『フラント・リカバリー超光合成』」

「『ハーモニクス倍音身』そして『ハンドソニック音速の刃』」

双方の能力を簡単に説明すれば『倍音身』は分身能力、『音速の刃』は自身にその名の通り音速で振動する刃を装備させる。

音速で振動を繰り返すことにより、切れ味はさらに増す。

「植物なんか叩き切ってやる」

対戦科目 数学

Fクラス 吉井明久 448点（特殊召喚）

VS

Dクラス 清水美春 302点

「負ける訳には、いかないのです」

「そんなこと、いつまで言えるのかな」

彼女の攻撃手段、防御手段を全てシャットアウトする。精神的にもダメージを与えることで自分が有利になるよう事を進め、そしてクライマックスへと持っていく。

いつしか彼女は狂ったように攻撃の手を止めず、僕はこんな狂った同性愛者を見て哀れに思った。後でしょーちゃんに頭なでなでしてもらおう。

「だから、とつとと消えれば楽になれるのに『ハウリング高騒音波動』」

「この耳をつんぎるような苦しみは……」

カラオケとかでよくあるハウリング、それをさらに強化したのが『高騒音波動』で、威力は計り知れない。

特に相手の動きを一時的に封じるのは容易い。そしてその際こそ、僕が勝利する近道であって。

「襲撃」

その一言だけでこの決戦は終劇する。

第二話 同性愛者と天然博識と依存愛者（後書き）

如何でしょうか。

ちなみに、元ネタは伏せて置きます。
たぶん意味ないですが（笑）

そして次回予告。

次は雄二メインかな？
一応代表同士の交渉が始まり、そしてFクラスの面々をもつと書いていきたいと思えます。

当分試召戦争はないのかな？
とりあえず、あと数話その予定はありません。

ではでは

第三話 決着と交渉と雄二の狙い（前書き）

ども、一週間ぶりのoupです。

今回は割とあっさりした感じだと自分では思っています。

んで、ムッツリーニ君と雄二の仲もわかったりわからなかったり。

とりあえず、ごんげ。

第三話 決着と交渉と雄二の狙い

「明久、それに翔子ちゃん。今日もすまないね」

「明久が行きたい場所が私の行きたい場所」

「僕は召喚獣達と遊べて嬉しいから来てるだけだよ、それにしょーちゃんがいてくれるならどこだって天国さ」

文月学園特別プログラムの代表的なものとして召喚獣があげられるが、その特別は誰だって使えるわけじゃない。

この学園でのテスト、面接を通して300人を選抜する。その中には召喚獣を扱うにはレベルの低い連中も少なからずいる。

まあ、素質があるやつしか選ばないから一年間でどうにでもなるのが実際問題さ。

そんな中、私の孫の明久は特別だった。

「今日は何を見せてくれるの」

特殊能力『映身』……。

他の召喚獣の特殊能力を自分自身の能力に付与する『予測しなかった』特殊能力。それが自分の孫が扱える、そして既に扱える点数を持っていると知った瞬間から明久は運命から逃れることは出来なかった。

明久達は知らない。

技術は受け継がれるものであり、試召戦争システムもまた例外ではないことを。

第三話

決着と交渉と雄二の狙い

く雄二く

『試召戦争終了、勝者Fクラス。両クラス代表は速やかに各交渉を進めるように。尚、各教職員は召喚フィールドの生成を止めるように。繰り返す、試召戦争終了、勝者……』

校内放送により我がクラスの勝利を確認した俺は、補習室（という名の地獄）から帰ってきたムツツリーニや秀吉達と合流していた。

「く苦労だった、二人とも」

「散々じゃったのう、ワシらは」

「……保健体育ならば」

「なに、今回は試召戦争に慣れるための戦いだ。これ以降は頑張ってもらおうがな」

とりあえず、テストで点数がとれるようにはなってもらわなければ困る。

「秀吉、お前の得意科目ってなんだ」

「得意、と言われても……ムツツリー二や島田の爆発的な点数はとれんが、化学や物理は好きじゃ」

「了解した、明日から理科携帯の勉強を強化するための問題集を持つてくるから、毎日指定した分だけこなしてくれ」

「これも試召戦争に勝つための努力じゃな」

「ああ。他には各教科の基礎をやってもらっ、各自で勉強してくれ。次の回復試験はまだ見逃すが、その次の回復試験では現在最高点を最低でも10点は更新しやがれ」

「そうは言われても、俺達は自分にあつた勉強の仕方も分からないんだが」

「須川、なんのための文月学園だ、貴様等にはちゃんと教材を用意してくれる環境があるじゃないか」

文月学園の学費の中には、教材費（教科書代を除く）がありテストを受けるために必要な紙やら業者から買ったテスト代も含まれている。

そして、参考書（文月学園印限定）の代金もその内訳の中に入っている。

「文月学園印のドリルをこなせばいいじゃないか」

「だが、しかし。あれには手続きが……」

「既に手配は終わっている」

俺は、廊下に積んである段ボール数箱を指差して言った。

「ちなみに、レベルは小学生高学年で解答は抜き取ってある。その代わりに解説冊子も付けてやった。ありがたく思え」

「流石は代表と言う訳だが……」

『あれこなすのかよ……』

『勉強面倒なのによ……』

『なんのために勉強しないFクラスに入ったんだか……』

『姫路さんがいてくれるなら何もいらない……』

「皆やる気が出てない見たいだぜ」

「まったく、しょうがない奴らだ。」

「このドリルを多くこなした上位五名、そして回復試験の上位五名にはムツツリー二商店の半額券を俺が進呈しよう。ちなみに、回復試験対象除外者はこのドリルをやらなかった者、そして明久や姫路等の成績優秀者だ」

「……仕方がない、許可しよう」

『『『頑張ります』』』

「悪い、ムツツリーニ。今度また一眼レフでも」

「今後ともよろしく」

親父が昔集めてたカメラをこっそり盗っておいて正解だった。

「さて、お前等。割引したけりゃ勉強しろ」

〜明久〜

「さて、ウチらは交渉場所に向かうとしますか」

「別に構わないけど、ちょっと待ってて」

もうすぐ来るから。

「明久、お疲れ様」

僕の天使が。

「うん、僕頑張ったよ。特殊試獣召喚までしたんだから」

「そう……よく頑張ったのね」

そして頭を撫でてくれるしょーちゃん、その手のあたたかみやその笑顔を見るだけで、僕は報われた気分になる。

「うん、しょーちゃんに褒めてもらうためだもん。頑張るよ」

心から癒されるのを感じ、ますます幸せが増す。

「あの……そろそろ行きませんか」

姫路さんからそう言われ、僕達は交渉場所のDクラスに向かった。

そこには、既に雄二達がいる。清水さんを待っていたみたいだった。

ルール上、交渉に他クラスの生徒は立ち会ってはいけないから僕はしょーちゃんと一時的に別れた。

また後でいっぱいいっぱいしょーちゃんと色々とするから、この後が楽しみで仕方がない。

「あんたが代表か」

「そうよ……」

しばらく、両者の睨み合いが続いた。

「この教室が目的なんでしょ、さっさと交換を進めましょう」

「いや、設備の交換は行わない。どうせ狙うはAクラスだ、お前達とは交渉を行いにきた」

「交渉……？」

「ああ、この先三ヶ月間は俺達の練習相手を渋らないこと、それと

俺が指令を出す一度だけ、Aクラスに立ち向かってくれ」

「条件が多過ぎますわ、交渉は不成立です」

意外とあっさり蹴散らされたが、やはり雄二はそこで終わらなかつた。

「じゃあ、その『新緑の腕輪』を貰おうか」

Dクラス代表腕輪、これが無くなったところで代表が変わる訳でもないが、雄二がそれを欲する意図が分からない。

戦力の上昇は間違いないけど、一体誰が使えるんだろうか。

Dクラス用の腕輪なのだから、学力だってそれ並なければならぬはず。それをクリアしているクラスメイトは少ないし、既にかなしの領域に達している人ばかり。

雄二が僕に腕輪をあずけたのも、多分雄二の仮染の成績じゃ腕輪の意味が無かったからだと思うし、その中でも僕が一番使いこなせるからだとも思う。

姫路さんとは相性悪そうだしね、あの腕輪達。

「いいでしょう、愚民の命令を聞くよりかはマシです」

「じゃあ、これは貰ってくぜ」

僕は知らなかった。

雄二の本質を、本当の狙いを。

第三話 決着と交渉と雄二の狙い（後書き）

さて、どうだったでしょうか。

次回予告なんですが、今のところちょっと忙しいのでupが遅れる
と思います。

それなんで、今回は想像にお任せします（笑）

第四話 つかの間の休息と『漢』の約束と入り乱れる想い（前書き）

どうも、今回はなにかと時間があつたのでうpします。

前次回予告しなかったので、今回は前書きでつてことで。

前半は、秀吉と雄二が約束をしつつ……。

また新たな関係もわかってきます。

後半は読んでからのお楽しみということぞ。

簡単な説明でしたが、とりあえず、どうぞ。

第四話 つかの間の休息と『漢』の約束と入り乱れる想い

「本当にそっくりね、あの二人」

「見かけはね。でも性格とか違うから……」

「そうね、それも悪くはないと思うけど。あ、優子ちゃんテストでまた学校トップだったらしいじゃない」

「ええ、そうなの。優子は勉強熱心で……」

ワシは知っておった、自分が姉上の劣化した者だということをし、そして決して母上に優しくされないことを。

辛かった、苦しかった。

そんなワシを救ってくれた演劇に、今でも感謝している。

演劇をしている間は、何もかもが忘れられる。

だけれども、現実からいつまでも逃げる訳にはいかないのじゃ。

ここで、ワシは変わる。

第四話

つかの間の休息と『漢』の約束と入り乱れる想い

く雄二

今回の勝因はやはり明久の力が大きい。いくら消費していたといえ、一人であれだけの戦力になる……。味方だからいいが、敵だと思つとぞつとする。

姫路は今回数学の点数を重点的にとつて貰つた。回復試験なので、他教科を一つ捨てれば数学にかけられる時間数も飛躍的に上昇する。

そんな中、通常のテスト時間内で500台を取れるムツツリー二はかなり凄いと言つても言いだろう。今は保健体育限定だが、まだまだ他教科の上昇見込みもある。

「ねえ、ゆうくん」

「なんだ、明久」

「しょーちゃんがそこで待ってるよ」

明久が指差す方向には翔子の姿が見えたが、翔子は明久の方をずっと向いている。

……明久はまだ勘違いしたまんまなのかもな。

「俺は先に皆に指示があるから、先に二人で帰っててくれ」

「りょーかいだよ」

忍者ハッ○リくんも真つ青なスピードで翔子の元に駆けていった明久は、そこでUSBメモリを落としたが気づかずにとつと出て行ってしまった。

まあ、後で連絡すればいいか。一応メールだけはしておいたが翔子に夢中になってしている明久が気づくかどうかだな。

あいつらが普通の人生を送れたのなら、俺はこんな思いをしなくていいんだろうか。

このことも何度も頭に浮かべ、そうしては落としてきた。進んでしまったものはしょうがない、俺は自身が出来る最大限のことをするだけだ。

それは今……。

「坂本よ、ちよいといいかのう」

「おう、なんだ」

「その……『新緑の腕輪』をワシに預けてくれんかのう」

秀吉は少し俯きながらそう言った。それは小さな子供が親にねだるそれとならかわりない表情だったが、いかんせん俺は秀吉の親ではない。とりあえず冷静に話を聞くことにした。

「理由を教えてくれないか」

「ワシは強くなりたい、強くなって見返してやりたいのじゃ」

その思いを吐き出す秀吉は、今までに見せたことない表情をあらわにしてまで伝えたかったのだろう。

「この場合での『強くなる』」「テストで点がとれる」ということを前提で話を進めるなら、俺は迷わずに秀吉に腕輪を渡さないべきだ。

「秀吉、残念ながらこの腕輪には仮染の強さしかない。もっとテストで点をとって、召喚獣自体の力を増やすことが第一だ」

秀吉は一瞬気を落としたかのように見えたが、直ぐさま俺の目を見ながら。

「なら……テストで点が取れたなら文句はないんじゃないな」

「ああ、だがしかし条件をだそう」

いつもと違った『漢』の表情を見せた秀吉に感服を表し……いや、それより寧ろ秀吉の後ろのあいつに免じて今回は大目に見ることにした。

「次の定期試験、つまり中間テストにおいて各教科の最高点を50点以上更新し、尚且つ理科系統の教科は90点以上とること」

秀吉の平均点はクラスでも真ん中辺り（明久や姫路等のイレギュラー因子は除いて）なんだから、これが妥当なラインだ。

これが出来ればEクラス代表レベルと互角の戦い出来る、Dクラスレベルなら苦戦を強いられるが負ける確率の方が少し高くなるって位だ。

それに、この『新緑の腕輪』を扱うにはそれ相応のリスクがある。

「約束じゃぞ」

いつもと変わらぬ満面の笑みに、俺は呆気をとられてリスクの話を出来ず仕舞いになった。

まあ、嫌でも分かることになるだろうし、それに秀吉ならばきつと大丈夫だろう。

「お疲れ様、ゆうじ」

「……学校ではその名で呼ばない約束じゃなかったのか、弟はちゃんと約束守ろうとしているってのに」

物陰から出てきた木下姉……もとい優子に俺は告げる。

「だってえ、我慢できないんだもん」

普段の豪傑な姿には見られない『女の子』の優子、どっちが本当のそれかどっかはさておき、俺と優子がこっぴつ関係にあることを皆が知らないことも驚きだ。

裏でムツリーニが工作してるんだが、まあそれは置いておいてもいいだろう。

「我慢出来なくても、ダメなもんはダメだ。約束を守らないなら、今日は褒美をやれないな」

「っ……、それはイヤ」

まるで餌をねだる小動物のように、俺に寄ってくる優子を少しな

だめながら、俺は作戦第一段階がシナリオ通り終了したことを喜んでいた。

……今回はそれに免じて許してやるよ、優子。

「明久」

「明久、おいで」

ここはしよーちゃんの家、とっても広いのにしよーちゃんのプライバシーはちゃんと守られているらしい。しよーちゃんの為に一度はこのサーバールームに入って安全を確認したいのだけれど、しよーちゃんがサーバールームに入ることを許してくれない。

多分、見られたくない何かがあるんだろうし、しよーちゃんが大丈夫だというなら大丈夫なんだろう。

「うん、しよーちゃん」

手招きされてしよーちゃんの隣に座る。

ふかふかのソファーに二人で腰掛けて、暫しの休憩タイム。

「今日は本当にお疲れ様、明久」

「僕はただ雄二の指示に従っただけ、自分では何もしてないよ」

いくら自分が決めたことでも、後味が悪いのが辛い。

「それでも、明久は大将を討ち取った」

最初は出ようと思って無かったけどね、と言いかけて頭に感じる温かさに僕の口がその言葉を紡ぐことも無かった。

「ありがとう、またこれで頑張れる」

感謝してもしきれないほどに、しよーちゃんにはいっぱい助けて貰った。

思えば、あの時。

僕が我慢せずにこの思いを伝えられたならどれほど幸福だっただろう。どれだけ辛い思いをせずに済んだだろう。

「ねえ、しよーちゃん」

「なに、明久」

「雄二のことって、まだ好きなの」

聞いてはいけない言葉、今までそれを守ってきた言葉。

でも、聞きたかった。いや、聴きたかった。

しよーちゃんの口から、僕はしよーちゃんの本当の気持ちを聴きたかった。

「……………」

案の定沈黙を貫こうとするしょーちゃんに見えたが、僕は信じられないことを聞いた。

「私は明久が好き」

そう言ってしょーちゃんは僕を抱きしめる。

「ずっと、ずっと好きだった。明久と出逢ってからずっと……」

いつもの温もりとは、少し違ったほんわかとした温かさ。

僕の頭の中では、しょーちゃんの手がずっとリフレインしている……。

第四話 つかの間の休息と『漢』の約束と入り乱れる想い（後書き）

どうでしょうか。

明かされる雄二と優子の関係。

この作品では、まさかまさかの雄二×優子ということちらもマイナー
カブ……。

おまあ、サブに過ぎないんですが（笑）
要望があればもっと前面に出てきますよ。

そして次回は明久の独壇場。

過去一本で通すか、過去現在織り交ぜで行こうか悩み中です。

とりあえず、また三日から一週間ほど空間が開くんじゃないかと思
われます。

いつも感想を書いてくれる方々に感謝しつつ。
今日はこの辺で。

第五話 相互依存愛者と狂い始めるシナリオと主の変わった道化師（前書き）

えっと、今回は次回予告とちょっと違ってしまいました但過去について少々書いています。

そして今回もまた【バカ努力】からちよつとばかりオマーージュしています。

「ちゃんと作者の暮灘さんから許可は得てるんで大丈夫です。

今回からあとがきにちよつとしたゲストを呼んでおります。その編も含めて、楽しんでもらえると幸いです。

第五話 相互依存愛者と狂い始めるシナリオと主の変わった道化師

知らない、天井。

何があつたかさえ思い出せないまま、身体が叫ぶ痛みで思い出さざるをえない記憶。

身体中には痣がところどころにあるだろう自分自身の身体はもはや自分の身体ではないような感覚に襲われる。

少し深呼吸して、あたりを見回す。

とても大きな空間、とても静かな空間。

そんな空間でただ一つ音を告げる心電図の音だけが響き渡る中、僕はその病室のベッドに横たわっていた。

いい塩梅に時計を見つけ、時刻を確認すると今は丑三つ時のようだ。所謂深夜、誰もこんな病室には入ろうとはしないだろうし入ることすら許されないだろう。この病院がどんな病院かなんて知らないけれども、普通の病院ならばこんな時間に面会は許されない。

寝袋で泊り込む人がいたらしいけど、それはそれでどうかと思う。

まあ、こんなにだだっ広い病室（例えるならば某特殊政府機関のパイロットが入っていた病室）で一人寝ようなんてことは誰もしないと思う。まして、僕は階段から落ちたという設定で別世界に飛んでいたわけでもないし、どこその団長さんとも知り合いではない。

久しぶりに頭を働かしたから、色んなことがごちゃごちゃになってるや。

とにかく、今まで寝てたけれども頭を落ち着かせるためにもう一度眠りにつこう。

きっと、次は誰かが横にいてくれるはず。

それがしょーちゃんだったら、いいな……。

第五話

相互依存愛者と狂い始めるシナリオと主の変わった道化師

（翔子）

明久が眠ってからもう三日もたつ。

あの後、すぐに119番通報するよりも、お父さんと呼んだほうが早かったので救急ブザー（サイレント）を鳴らして、迎えを待った。

「明久っ、しっかりして」

私の呼びかけにも答えず、ただただ横たえるだけの明久。

私を守って、今にも死んでしまいそうな明久。

元々女の子のように綺麗で白い肌は今も尚血の気が引いていて、死人のそれとやら変わらなくなってきた。

死なないでよ、明久。私を置いていかないで、私はまだ明久と一緒に色んなことがしたいよ。

「明久……」

「雄二、明久が……」

どこからか現れた雄二に状況を簡単に説明しているうちに、お父さんはやってきた。

「翔子、大丈夫か！」

「明久が、明久が……」

屋上にへりを留めていたお父さんは、明久をひよいと担いでぐさま走っていった。

その間、雄二は拳を握り締めて怒りに震えている様子だった。

あんなに雄二を怖いと思ったのも初めてだった。

「お嬢様とお友達はこちらへ」

使用人に連れられ、霧島特別総合病院に向かう。

「雄二」

「……明久なら、たぶん大丈夫だ。またいつものように笑ってくれ
る」

その言葉が本当になるには、一年という長い年月が必要だった。

一年で明久は変わった、言うまでもなく私も、そして雄二も。

明久は急に頭が良くなった。テストで点が取れるということが頭が良いと言うならば、まさに明久はそうだった。

そうじゃなくても、明久は要領がとても良くなった。今では市販できるようなプログラミングさえ簡単にこなす。

霧島家のメインコンピュータには明久印の頑丈すぎるほどのセキユリティが施されていて、それは未だかつて破られたことがない。

そんな明久に、私はますます惚れていった。

雄二は、勉学を否定し始めた。

学力がすべてだと思っていた雄二にとって、今回明久がああなっ
てしまったことはきつと雄二にとっても良くないことだったんだと
思う。

そして雄二は一度は私たちの前から消えてしまった。

残されたのは、私と明久。

そして私は明久の一挙手一投足、その行動すべてが好きだった。
自分がそれに溺れていくのを感じながら、私はその愛という奈落の
底に落ちていった。

雄二は元から憧れではあった、昔は雄二のことが好きだった。雄

二の背中を明久と追いかけていた、今までは。

今は違う、明久と一緒に居たいがために雄二の背中を追いかける。いつの間にか目的と行動が逆になってた、可笑しいでしょう。

「私は明久が好き」

もう耐えられない、明久だってそうでしょう。

私は知ってる、明久のことなら。

今日一日何をしていたかも、昨日何をオカズにしていたのかも、全部全部。そしてそのオカズは毎日変わらず、私。

今度は本番できたら良いのに。

「ずっと、ずっと好きだった。明久と出遭ってからずっと……」

その言葉に偽りはない、あるわけがない。

あんなに魅力的なのに、惚れないわけがない。

あんなに甘く濃厚な幸福に、依存しないわけがない。

「明久」

「しよーちゃん……」

言葉が詰まるのを感じる。

ずっと好きだった、でも手が届かない位置に居ると思っていたし
よーちゃん。

信じられなかった、信じられるわけがなかった。

いつだって雄二を追いかけていた、いや、追いかけているだろう
と思っていたしよーちゃんが、僕のことを……。

「雄二はどうしたのさ」

「雄二は私の目標だった、憧れだった」

なら……。

「でも、目標は目標でしかない。同様に、憧れは憧れでしかない」

それだけ言えば、もう分かるでしょ？

それともまだ、私に言わせる気？

とでも言いたいかなのような瞳に、僕は思わず頷いてしまった。

それほどまで、僕はしよーちゃんに惹かれていたってこと。それ
ほどまでに、僕はしよーちゃんに溺れてしまっているってこと。

そして、しよーちゃんに依存しているってこと。

本当は盗聴されてることも分かってる、僕にはプライバシーなん

ていけないんだ。しよーちゃんが僕のプライバシーを握っている限り、僕は幸福だから。

しよーちゃんに管理されて始めて、僕は僕で居られる。

本当の両親に捨てられたって、僕にはしよーちゃんがいる。

「僕も、大好き。しよーちゃんだけが」

それ以外の答えはない。

あるなら僕に教えて頂戴、これを否定するようなら万死に値するけれどもね。

「しよーちゃんがいるならば、どこだって天国だよ」

今にも泣き崩れそうなしよーちゃんをそっと抱き寄せて、僕はこっぴどく。
う眩く。

「これからも、ずっと一緒に居てほしい。僕はしよーちゃん無しでは生きていけないんだからね」

後ろに回された腕がより一層強くなったのを感じて、僕は幸福を噛み締めていた。

……ゴメン、雄二。

約束、守れそうにもないや。

うっん、違う。

君が最初に約束を破ったからいけないんだ。

僕は分かったよ、君の秘密を一つ。

君のシナリオ通りにはいかせない、だってそうでしょ。

僕はもう君の操り人形じゃないんだから。

第五話 相互依存愛者と狂い始めるシナリオと主の変わった道化師（後書き）

いかがだったでしょうか。

【バカ努力】から『雄二を追いかけるために……』の件を拝借しました。

次回予告とは違った形でしたからちよつと心配な星しです。

??「えつと、アンタが星しかい」

星し「そうですけれども……ってキヨンじゃないか」

キヨン「よう。あ、長門を見てないか」

星し「いや、見てないけれども……」

長門「私はここにいる」

キヨン「長門、探したんだぞ」

長門「すまない」

星し「なんで二人ともここに」

キヨン「今回はお願いをしに来た」

果たして、そのお願いとは。

次回予告は例によってしませんが、また次回も楽しんでもらえれば幸いです。

第六話 崩れた企みと新しいクラスと明久神話始動（前書き）

今回はまたまた設定がチラチラ見えちゃいます。

この際一度はこの世界の設定をしっかりと定めたいなと思ってますが……。

なんせ設定ガン無視で物語を無理やり詰め込みそうになるんですよ。

今回も各種設定で出していたアレも設定変えてしまったし……。

とりあえず、後書きにはまたお二人さんが登場です。

それでは、どうぞ。

第六話 崩れた企みと新しいクラスと明久神話始動

俺はあいつらのことをちゃんと理解してやれなかったみたいだ。

それに、気づけたはずだった。

『やあ、雄二』

こうなる結末があったことを。

『ありがとう、雄二』

だが、こんなに早く訪れることを誰が予想しただろうか。

「おつ……良かったな」

家に備え付けられたテレビ電話から二人が挨拶するのを見届けながら、自分のシナリオが崩れ落ちるのを感じた。

少なくとも、俺が予期しなかったことだ。いつかはこうなるとは思っていたが、こんなに早いとは。やはり明久と翔子を別離したのが逆効果だったか、それとも俺の監視が行き届いてなかったからなのか。

いずれにせよ、今更この二人が止まるはずもない。それゆえに、俺のシナリオはプラン丸ごと変えざるを得ない。

でも、本当に幸せそうに話している二人を見て俺は心が痛んだ……。

第六話

崩れた企みと新しいクラスと明久神話始動

明久達との通話が切られた後、俺はそのままあるところへと繋が
た。

『なんだい、こんな時間に』

「ああ、悪いとは思ってるぞ」

『例の件はまだ八割方しか完成してないさね、我慢しな』

ちっ、まだか……。

「そっか、ならいいんだ」

相手の返事を待たずに電話を切る。

「それにしても」

各クラスの代表生徒に始業式の後渡された資料、クラス名簿や試
召戦争のルールが記載されていたが、特筆すべきのはこれではない。

「新しい『召喚獣』ねえ……」

その資料を読み返しながら、俺はそのことについて考えていた。

資料を参照しても特徴が把握できない、というよりははしようが
ないが一つだけ分かっていることは『試召戦争への革命』ってこと

らしい。

それはさておき、新たな戦力が出来るのは心強いが持久戦が増えそうな気がしないこともない。

使用に制限が設けられるのはほぼ確定だな。

「さて、召喚獣の扱いに慣れようか」

実のところ、俺は自分自身の召喚獣をあまり把握しきれてなかったので、地下室で召喚フィールドを用いて練習していた。

なぜ、地下室にフィールド（得点自由操作機付）があるのかは俺にも分からん。まあ、ここで練習しても点数が減らないことや、仮定点数での召喚獣の動きについてなど、色々と分かるので便利だ。

まあ、誰でも召喚出来るので腕輪能力が使えないのが一番の難点と言えるであろう。

「試獣召喚」

召喚獣を呼ぶための呪文、というよりかはパスワードに近いそれを唱えると、いつものように自分の召喚獣が出てくる。

とりあえずは簡単な動きを完璧にする目的で基礎練習、その次は武器を用いた練習に切り替える。

基本的に俺は試召戦争では闘わないが、Aクラスを討ち取るためにはとりあえず俺自身の戦力も強化しとかないとな。

いざ闘う時に役立たずじゃあ、代表の名が廃る。

いつもの練習を数セット終わらせ、クールダウンを行っているところだった。

不意に学校からのメールを告げる携帯。

さっきのことではないにしろ、何かしらの情報が入ってくることは確かだ。

そう思い、俺は携帯を開く。

From 文月学園

To Sクラス候補生徒へ通達

この度、文月学園では特別進学コース（名称をSクラスとする）を設けることになりました。

つきまして、その候補生徒を選出しました。その結果に基づいて今回は通達といたしております。

この候補生徒の内、Sクラスで勉学に励みたい生徒数が定員を超えた場合にはテストを行い、その順位で決めることとなります。

以上、文月学園Sクラス代表。

Sクラス……。

予想だにしないことが立て続けに起こるのはあまり良くないことだ、急な予定はやはり自分の愚かさを見返すだけ。あまり得策ではないが、まあシナリオも今から変更するところだったから返って丁度良かったのかもしれない。

兎に角、今は召喚獣の扱いに慣れておくことが重要だ。

〜明久〜

雄二との通話が終わり次第、僕はおばあちゃんと交渉していた【アレ】を実行するべく、携帯を取り出した。

文面はすでに出来てる。だがそれを送るメンバーの構成がまだだ。

試召戦争はテストの点数だけで決まるもんじゃないし、それに僕に従順かどうかも考えないとね。

試召戦争は僕としょーちゃんだけで何とかなるかもだけれども、反乱軍とか出てもらったら困る。僕はそんな対処に手加減できないから、本当に困る。

とりあえず、主に自分の交友範囲＋学力のいい人にメールを送ることにした。

「しょーちゃんは勿論僕のクラスに入ってくれるよね」

「……もちろん」

トロンとした甘い瞳で見つめられて、思わず口づけをする。

だって、こんなに愛しいんだよ、今まで我慢してきた分補給しなくちゃね。

特別進学クラス、通称Sクラス。

表向きは、超進学校（某T大とか）に合格すべく勉強するクラス。

裏向きは、試召戦争があるべき姿にすること。

戦争って名前がついてるんだ、もっと残酷なまでに……ね。

「それで、その腕輪はどうするつもりなの」

しよーちゃんが虚無の腕輪と純白の腕輪を指さしてそう言う。

「ああ、虚無の方はいずれFクラスから回収するつもり。純白の方は君にプレゼント、後で設定を変えておくからどんな特殊能力がいかが言ってみて」

純白の腕輪。

この間のアップグレードにより、ノンリスクに成功している。そのアップグレードのデータを元に純白の腕輪のデータを初期化することには成功していて、いつでも好きな特殊能力を付与することが可能になった。

流石にチートすぎるのはダメだけれどもね。

「じゃあ、私の召喚獣がフィールドに存在し続ける限り、相手の点数を徐々に奪っていく。そんな腕輪」

毒々しい能力だけれども、それが彼女の純粋な想いなんだろう。

勝手な解釈だけれども、僕以外の連中が生きることさえ許されないような空間を作りたいのかもしれない。

言い終わってからずっと、僕の腕にしがみつくしよーちゃんを見て僕はそんなことを思った。

「分かった。今すぐにも始めるよ」

僕の強みは、いくらでもある。

おばあちゃんは学園長だし、召喚獣のプログラミングにだって参加している。召喚獣の成り立ちを完全に把握しているのは僕だけかもしれない、いや、僕だけだ。

科学とオカルトと偶然によって生み出されたとされる召喚獣も、実は仕組みられたものだった。

それが誰に仕組みられていたって？

聞くまでもないだろうね、わかるでしょ。

僕だ。

第六話 崩れた企みと新しいクラスと明久神話始動（後書き）

如何でしょうか。

個人的にオリキャラがだんだん空気になってる感が否めないので、次回は加藤君にこの世界を案内してもらおうかと思いつつ（変わるかもしれない）

キヨン「えらいまた、曖昧な」

星「いやあ、不定期更新の癖に内容もあんまり濃くないし……」

長門「二次創作はプロアマ位が丁度いい」

星「え、それって……」

長門「あなたはアマチュアもいいところ」

星「長門さんがいじめるやい（涙）」

キヨン「いや、自業自得だろ」

星「そういえば、こないだのお願いってなんだっけ」

キヨン「立ち直り早いな」

長門「情報連結を解除されたくなければ……」

星「よし、許可しよう」

何があるか知らないまま、なぜだか勝手に話が進んでしまっただが、まあ、長門さんに消されたくはないし、この拙い作品だって読んでくれる人がいる。

そんな人たちに感謝感激です。
ではでは、これで。

第七話 気分転換と慣れ親しんだ町と新たな……。 (前書き)

……。

あれ？

前回更新は、五月の下旬……。

今日日？ 今日には既にもう三週間くらいたつてるといふ。
まだ読んでくれる人いるかな？？

とりあえずは更新。

第七話 気分転換と慣れ親しんだ町と新たな……。

日常。

それがありふれた日々をさすのに相応しく、その言葉を用いることにより人はそれを認識する。

言葉の重みは深く、さらに言葉一つ一つに魂がある。所謂言魂つてやつで、自己暗示もその一種だ。

「おはよう、父さん。母さん」

返事がないことを知って尚、俺は二人に言葉を送る。言葉は言魂、俺の声そのものが届かなくても俺の魂は届いているはずだ。

「それにしても、俺がSクラスか……」

昨日届いたメールにもう一度目を通し、俺はそう呟いた。

多分、明久も呼ばれていると思えば俺はSクラスへの編入に躊躇していた。

幸いなことに、今日は学校が休みだ。俺はこの休みを利用して色々と考えに耽ることにした、この街を宛てもなくブラブラするのも久しぶりだしな。

となれば、善は急げだ。

気分転換と慣れ親しんだ街と新たな……。

〜加藤〜

休日の朝ご飯もいつもと同じ時間に食べる、生活リズムの崩れを防ぐためと脳に安定してエネルギーを送るためでもある。

今日は玄米飯に味噌汁、鯖の塩焼きという何とも日本人らしい朝ご飯。

もつとも、一人暮らしを余儀なくされた俺にとってはこんな朝ご飯は休日位しかできない。

少しセンチメンタルな気分になりつつも、休日の少し豪華な朝食を食べ終えた俺は身支度を始めた。

いつもならとつと勉強に励むんだが、今日は後回しにすることにした。多分今やっても全然身にならないから。

年頃の男子としての嗜みをちゃんと終わらせ、ペンダントを首から下げる。

少し古くなってきた紐の先に結んであるのは昔母さんから貰ったとある宝石、名前や意味は忘れたけれどもこれを着けることで俺は母さんと繋がってる気がした。

今もどこかで見ているのだろうか……。

なんて、少し女々しい考えを浮かべてから振り払う。

誰かのためじゃない、自分のためだ。

俺がああ裕福な空間から飛び出すのに、他に理由はいらなかった。確かに、何一つ不自由は無かった。自分のやりたいことを精一杯やらせてもらった。だけれども、それは温室で育った植物のように結局は朽ち果ててしまう。

言わなければ俺が腐ってしまいそうだった。

皆自分に枷を嵌めている、というよりか誰かから嵌められていると言っべきか。

人は皆平等ではない。

皆が平等であるなら人は進化しないし、選択の自由すらも必要がない。人は一人一人違う、だからこそ必然的に人は不平等なんだ。

……朝から何を考えてるんだか。

気分転換しに出かけるのはやっぱり間違いないじゃなかったみたいだな。

春の麗らかな陽射しを受けてもう青々としてきた桜の木、一時期しか目に留めない人もいるけれども夏の桜もまた綺麗だ。

科学と自然の調和、そのシンボルとしての日本。

これにより、日本ではここ数十年間は公害の類は皆無だ。それに、その技術が海外にも認められて今ではGDPも群を抜いて高い。

まあ、そんなことはどうでもいいか。基本的には今の日本は少なくとも国債を膨大に背負うようなことはしてないってこと。

なんか嘘臭い話だよな……。

街頭を歩き回りながらあちらこちらに見える日本のシンボルマークを見ながら、俺はそんなことを思った。

「おつ、加藤じゃないか」

「どうしたんだ、雄二」

「多分……気分転換」

俺と同じだな、と言って笑ってやる。

「じゃあ、どっか遊びに行くか」

どうせ気分転換するのはどこでも同じか。

とりあえず、ついていくことにした。

く明久く

僕は人とは違う、身体的にも精神的にも。

だからって不自由はない、しょーちゃんがいるから。

昨日だってあんなに愛おしいのに、今日はまたさらに愛おしい。そして明日になればもっと好きになってるんだと思う。

言わなければ幸せスパイラル……。あ、自分で言っておきながら結構気に入ったかもしれぬ。

そんな幸せスパイラル真つ最中な僕は現在霧島家のメインセキユリテイの更新をしている。しょーちゃんが厭な思いをしないためにも、僕は僕が出来るところまで頑張る。

「いつもご苦労様だね、明久君」

「おはようございます、お父さん」

この人はしょーちゃんのお父さん、外見は某白い髭の海賊と似ていて体格が良すぎる。

なんでも、その身一つで熊三体と闘って勝ったとかどうとか。

「君のおかげでサイバー犯罪に巻き込まれずに済む、いやはやなんとお礼をしてもしきれぬな」

「いえ、僕はこんな高性能パソコンを使わせてもらえるだけで嬉し
いです」

悔しいけれども、僕が選んだ選りすぐりの自作よりもこっちの方がプログラミング作成には向いている。

「そうかい、だがこんな逸材をただで働かさせるのは些か私のポリ

シーに反するのではな。今夜もよければディナーを共にどうかな」

霧島家の料理長集団（和風や洋風、中華など様々なジャンルの頂点を集めた集団）は国内の最高級ホテルよりも美味しい。

普通のファミレスより数百倍は下らない値段のフルコースをこうバンバン振る舞うって……。

こういう所にも霧島グループの財産保有金額の一片が見える、本当にすごいや。

世界中の大富豪を探してもこんなに気前の良い人は少ないと思うし、そんな人に頼られてるのは光栄だ。

とにかく、これで合法的にしょーちゃんといれる時間が増えた。

……まだだ。

まだ気づかれてはいけない、僕の本当の目的を。それに雄二の狙いだって丸潰しできた訳じゃないし、かつて神童と呼ばれた雄二よりも今は腕っ節が増しているだろう。

だからこそ、僕は準備を怠らない。怠る訳にはいかない、少しでも自分のシナリオを軌道に乗せるために。

さて、そろそろ連絡がつくころ……。

「【十二人の絵札計画】……始動」

まずは手始めに、スピード組。

キングは相変わらず倦怠感で一杯だろうが、ここは我慢してもらいたいね。

「明久、何か言った？」

「いや、なんでもないよ」

君はまだ知らなくてもいい、そしてこれからも知らなくたって構わない。

僕が、愛してるから。

第七話 気分転換と慣れ親しんだ町と新たな……。 (後書き)

さて、皆さんお気づきの……、

キヨン「次から俺たちが登場する」

長門「そう」

キヨン「実はそんなにやる気じゃない」

長門「そう」

キヨン「倦怠感MAX」

長門「そう」

キヨン「実はお前の方が面倒そうなんだが」

長門「……そんなことはない」

星「あの、お二人さん。私の台詞は？」

キヨン&長門「特になかったはず」

星「いや、あるよっ」

キヨン「何がだ」

星「……いや、もう言われちゃったし」

長門「なら仕方がない」

キヨン「また次回会おう」

星「最後まで台詞ないのっ?」

??「わふー」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7094s/>

愛とナイフと召喚獣

2011年8月8日10時00分発行